

草庵仏教

第228号
(発行日)

2009年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

欲愛と仏の慈愛

『大智度論』という仏教の書物には、欲愛と法愛という二種類の愛があることを説いています。欲愛とは妻子などを愛念するところの欲といわれ、法愛とは一切衆生を慈愛する慈悲心といわれています。

この欲愛が人間生活の元になつておられると思ひます。生きたいという欲と妻(夫)や子供を愛する心が人間生活――他の生き物も基本は同じでしょう――の基礎になつておられると思ひます。実際、生きたいという欲望があつて生きていけるのであり、働くのも金儲けをするのも、食べるのも、健康を気づかうのも生きたいからです。生きたいという欲求があるから、今まで生きてきたのでありましょう。もし、生きたいという欲求がなければさまざまな困難や苦しみに耐えてまで生きようとはしなかつたのではないのでしょうか。また、三度三度へ食べる

中に潜んでおられるのは「生きたい、生きたい」という本能的な欲求であり、(食べる)ためにはしんどい労働にも辛抱するのであります。

そして「生きたい」という生の欲求と性欲とは同じ根から出ているのではないのでしょうか。生きたいという欲望が形を変えて性欲になつておられるのであつて、別の欲望とは思へません。性欲は性欲とは根でつながつておられると思ひます。だから性という字は、(生)の字に「へりっしんべん」を付けただけです。

このように、欲愛とは、生きんとする欲と他を愛する愛と受けとることができましようが、ここでの愛は、慈悲とか慈愛とかいう愛ではなくて、欲愛としての愛、あるいは愛欲としての愛、愛着としての愛であります。しかしこれが人間生活の元になつておられます。

男が女を愛し、女が男を愛する。それがあつて夫婦となります。もし、男が女を愛し、女が男を慕う気持ちがあれば、結婚は成り立ちません。欲愛(愛欲)があつて夫婦となると子供が生まれる。子供が生まれると、理屈抜きに可愛いと思う。これまた欲愛であり、愛着でしょう。しかし、可愛いという欲愛の心があるから子供を育てることができるのであろうし、孫が出来れば孫が可愛いという愛着の心が起きるから孫の世話も出来るのでしよう。

問題は欲愛を本としておられる人間生活はそれで安らかであり浄らかであるかというところ、欲愛があるがゆえに、そこに喜びがあるとともに憂苦や瞋憎の煩悩がたえないのであります。妻(夫)や子を愛しいと思ふ心があることは、喜びの反面、心配や不安の因になります。つれあいが病気をすると、心配になり、子供たちの生計が苦しいことは親の心配の種となり、孫の勉強の出来不出来までが煩悩の縁となります。

きになります。愛別離苦は八苦の一つにも数えられておられます。愛する夫との別れ、愛する妻との別れは大きな悲しみです。先立つ可愛い子どもとの死別は、癒しがたい悲しみになります。この世の最後に人は親しい人々との別れが待つておられます。死んでいく人を見送る寂しさもさることながら、死にゆく人自身が皆と一人別れていかねばならない淋しさはいかばかりでありましようか。このように愛することは、喜びであるとともに、同時に心配や悲しみを伴います。

また、欲愛は相手からの愛を求めておられます。欲愛は欲深いのです。相手を可愛がるということは相手からの愛や慰めを知らず知らず求めておられます。だから、夫は妻に、妻は夫に愛を求めておられるのであります。可愛がるということ、可愛がることによつて相手から慰めを求めておられます。犬や猫を可愛がるのも、犬や猫によつて自分が慰めを求めておられるのであります。だから、愛し合つておられる、何かのことで、口論になつた

正信偈に学ぶ問答

(十六)

普放無量無辺光

無碍無对光炎王

清浄歆喜智慧光

不断難思無称光

超日月光照塵刹

(書き下し文)

普く、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、清浄・歆喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放つて、塵刹を照らす。

大応供を帰命せよ

と、この光を讃えておられます」

G 「このご和讃はどういう意味ですか」

D 「この和讃の現代語訳は〈阿弥陀如来の光明の輝きのすぐれていることは、とても諸仏の光明の及ばないところである。それで光炎王と申しあげると、それで、たとえ三悪道の黒闇の中にある衆生でも、この光明にあう者は、やがて往生を得ることができると。このようならばらしい徳のある、大応供とも讃えられる阿弥陀如来に帰命したてまつれ〉
となつています」

G 「三塗とは三悪道のことですか」

D 「ええ、地獄道・餓鬼道・畜生道のこと、地獄は瞋恚の心によって閉ざされた苦しみの境界、餓鬼は貪欲によって心が閉ざされた境界、愚痴は自己中心のおろかな想念

されても、まだ「仕方がない」とあきらめもつきません。しかし、夫婦や親子や兄弟の関係の中ではそうはいかず、いつまでもこだわり続けてしまします。

ただ、そうした人間生活の中で、弥陀の大悲心にであい、大悲心によって心の飢えが満たされてくると、相手が誰であれ、人からの愛や優しさを欲求する心が薄くなるのではないでしょうか。人の愛情によって自分を慰めようとせず、如来の大悲に大いなる愛を感じていく。如来は大安慰と仰せられる如く、私どもの心の深部から慰めてくださる。

それゆえ、如来の大悲によって、欲愛の生活における固執やひつこさが浄化され、悲痛や憂苦、怒りや憎しみが緩和されていくであります。

愛執のしがらみの中にある人間生活を浄化していくもの、それが如来の大慈悲の心であります。この慈愛によって欲愛が浄化されていく、それがこの世の道德となるのであります。 (了)

り、そしり合ったり、けんかをし、時には相手を殴ったり、あるいは不倫などが縁で、お互いの間に溝ができます。いったんお互いの間に溝ができると、それがまた更なる対立を生み、けんかやいさかいが一時のことではなくって、憎しみや怨みとなって胸の内に結ばれができます。

このように縁がくれば愛は一転して憎しみに変わります。親愛なるものの間柄ゆえにこそ、憎悪の関係にもなるのです。欲愛と瞋恚は心の裏表であります。俗に言う「可愛さあまつて憎さが百倍」と。見知らぬ犬にかまれた時よりも、可愛がつている犬にかまれる方が腹が立つのではありませんか。

欲愛は相手に愛を求めるゆえ、欲愛は相手を縛るものとなります。これが「恩愛のきずな」といわれます。

妻が病気の時に夫がほったらかすと、妻は夫を「冷たい夫だ」となじり、親が高齢となり弱っても子供が世話をしてくれないと、親は子供の親不孝を怨むようになりかねません。これが他人なら、ほったらかされたり、しらんぶり

仏光照曜最第一 光炎王仏となづけたり 三塗の黒闇ひらくなり

によって心が閉ざされた境界と、この光を讃えておられます」

G 「三塗とは三悪道のことですか」

D 「ええ、地獄道・餓鬼道・畜生道のこと、地獄は瞋恚の心によって閉ざされた苦しみの境界、餓鬼は貪欲によって心が閉ざされた境界、愚痴は自己中心のおろかな想念

によって心が閉ざされた境界と、この光を讃えておられます」

G 「三塗とは三悪道のことですか」

D 「ええ、地獄道・餓鬼道・畜生道のこと、地獄は瞋恚の心によって閉ざされた苦しみの境界、餓鬼は貪欲によって心が閉ざされた境界、愚痴は自己中心のおろかな想念

によって心が閉ざされた境界と、この光を讃えておられます」

G 「三塗とは三悪道のことですか」

D 「ええ、地獄道・餓鬼道・畜生道のこと、地獄は瞋恚の心によって閉ざされた苦しみの境界、餓鬼は貪欲によって心が閉ざされた境界、愚痴は自己中心のおろかな想念

古往今来へ行きつまりな
し。へ行きつまりは、人間
の心がつくるのみ。

といつておられます。行きつ
まりは心がつくるのですね。
自分が「ああなればよいのに、
こうなつら困る」という自分
の都合や願望を先立てて生き
ようとすると、都合の悪いこ
とや願わしくないことにおつ
かると、行き詰まるのです。
それは事実が行き詰まったの
ではなくて、自分の都合を優
先する自分の思いが行き詰ま
ったのです」

G 「よく自分の都合で苦しん
でいるのだから、自分の都合
を捨てて、現実を引き受けた
らいい、というような話を聞
きますが、そうすると自分の
「ああなれば、こうなれば」
という都合を捨てたらいいの
ですね」

D 「自分の都合を捨てられる
場合はいいのですが、自分の
都合や願望が捨てられないこ
とがあります」

G 「自分の願望を捨てられる
場合とは、どういう場合です
か」

D 「例えば、自分のやりたい
仕事をしたけれど、自分のや
りたい仕事につけなくて悩ん

でいる場合などです。こうし
た場合、へ今はどれほど願っ
てもどうにもならない、将来
をいたずらに夢見るよりは、
現在与えられた仕事をともか
くもやつていこう」というよ
うに、自分の願望を一端そば
に置いて、ともかくも今やる
ことを少々苦しくてもやつて
いこうと、今の現実を引き受
けていく。このような場合の
願望はまだ捨てることもでき
ましょう」

G 「では、捨てられないよう
な願望とは」

D 「死にたくない、生きたい、
というような願望です。ある
いは煩惱を離れたらというよ
うな願望です。そういう願望
は捨てられません。こういう
願望はいのちの根源から起こ
るような願いだからです。生
きたいが死なねばならないと
いうこと、また煩惱というそ
の罪悪性、そういう現実を引
き受けよと、いわれても引き
受けられません」

G 「生きたい、生きたいとい
う願望は捨てることはできま
せんね」

D 「ですから、どこまでも生
きたいというような大きな願
いにおいては、生きたいけど

死なねばならないという、行
き詰まりの黒闇に立たされて
しまいます。都合の悪いこと
だけど、引き受けますいうふ
うにはなれないのですね」

G 「こういう、いわば道が開
ざされてしまうような暗闇の
中で、どこに道が開かれるの
でしょうか」

D 「南無阿弥陀仏を聞くこと
によつてです。お念仏の思し
召しを聞くことです」

G 「どう思う思し召しですか」

D 「阿弥陀仏のお悟りから出
てきた絶対的な大悲の思し召
し、仰せです。へ汝を引き受
ける、必ず浄土へ連れて行く」
という不可思議な仰せ。真実
の言葉をお聞かせいただくの
です。」

G 「へ汝を助ける」という仰
せを聞くのですね」

D 「ええ、この大慈悲の仰せ
に随うとき、不思議にも、死
と罪への心の行き詰まりが開
かれるのです。三塗の黒闇が
晴れるのです。阿弥陀仏の無
碍光の徳はそのような根本的
な黒闇を除き、明るく照らし
てくださるので、光炎王仏と
讃えられるのでありますよ
う」

G 「いのちの底からの大きな
願望を押し進めていくと、ど
うしても自分の力ではどうす
ることも出来ない状態に陥ら
ざるを得なくなるのですね」

D 「そうなんです、けれども
行き詰まることを縁として、
阿弥陀仏の光明に触れ得ると
もいえます。ですから私たち
は小さな願望だけで生きるの
ではなくて、大きな願望をも
つことが大事だといえましよ
う」

G 「昔から、後生の一大事と
いうような願いのことなので
すね」

D 「ええそうです。自分の意
志では捨てることの出来ない
ようないのちそのものが持つ
ているような願い、こういう
願いに気がついてきて、初め
て自分における黒闇がむしろ
露わとなるのです」

G 「私たちは黒闇の中にいて
も黒闇の中にあることが分か
らないのですね」

D 「ええそうです。ある意味
でだれしもへ行き詰まってい
るのです。それが露わとな
らないから、そこから脱却
する道も開かれることがない
のです」

G 「三塗の黒闇はだれかさ
んだけの現実ではなくて、だ
れでもの現実でもあるのです

ね。それが、光炎王といわれ
る阿弥陀仏の光明によつて、
照らされ、知らされ、そして
その黒闇を開きたもう功德を
いただくことができるのです
ね」

D 「ええ、そうお聞きしてい
ます」 (了)

《住職雑感》

*五月二十日、種智院大学に、
四十年ぶりにインドから日本に
帰られた佐々井秋嶺師の講演を
妻と二人で聞きに行く。開演時
刻に間に合わなかったが、師の
ご尊顔に接することが出来た。
師は現代インドの新仏教徒のリ
ーダーとして、よく知られたお
方であるが、三年ほど前、八五
〇〇人を僧侶として得度させた
という、信じられないような大
きな事をなさった。不惜身命の
塊のような方で、この度もあふ
る情熱に心打たれたことであ
った。

*「心を脳が生み出している」
という説が確かなものかどうか、
それは謎で分かっていない。そ
ういう意味で不確かである。し
かし、そう考えているものがあ
ることは自明で確かな事である。
この確かさにデカルトは驚いた。

信心夜話

喚びたもう。まことに南無阿弥陀仏は広大な親心である。親鸞聖人がお念仏の真義を明らかにして下さらなかつたら、いつまで迷うていたことであろうか。聖人様の後に素直に随うばかりである。称え称え、聞いて聞いていく人生一路。煩惱の波、日々の状況の波はどれほど荒れてゆれ動くとも、弥陀のお誓いの船に乗せられている身は安らかであり、たとえ私の頭がぼけても狂うても、心根に染みついた《連れゆきたもう大悲のまこと》はゆるがぬ。)

大きな文字が松並さんの言葉。

*

○親は子に代って長劫の苦を忍うけ

六字の名声に成りて 満足す

あたえて撰取す 慈悲の親心

導き給う聖人のみ跡 慕いて往

く

称え果てて聞く 波風の立つに

つけても

我心狂えど ゆるがぬは白道の

信 誓約の船中に 乗身の安さ

(真実の親である阿弥陀如来様は私どもを仏になさんぐために、長い長い御修行を私どもに代わってしてくださった。私たちの貪欲の罪を除かんぐために貪欲の無い少欲知足の修行をされた。私たちの瞋恚の煩惱を除くために瞋恚の無い慈悲の行、忍辱の行をされた。このように私たちに仏因を与えんぐために、苦しき行を代わってされた。その結果、永き修行が成就し、私たちの仏因は出来上がった、それを南無阿弥陀仏の名号として成就されて、「これで衆生は必ず助かる」と一点の疑いもなく満足された。その名号を今、私たちに与えてくださり、そのお心を今、名号において聞かせていただく。《汝

午後からの御縁に、東漸寺様が私に「お願い致します」と、申されましたが、貴方様でさえ受けつけぬお方に、私如き者がと申し上げました。聞き入れては下さらず、やむなくそれではと申しまして、別室で二人きりで、お相続致しました。

三時の休憩時まで、三時の休憩時に、東漸寺様が別室にお越しになり、永田さんの姿を見て驚きなさった。永田様は「御院主様有難うございます。今日まではお詣りして家に帰りますと、夕食の用意が出来てない嫁に、何をして居たか不足ばかり言うて来ましたが、今日帰ったら、嫁に御礼申します。留守番してくれる御蔭で有難い御縁にあわせて頂いた」と。

東漸寺様は「それでこそお念仏が、家の中までお念仏が流れます。有難うございます」と。永田様に御礼申されました。

永田さんが帰られてから、私に「何と申されましたか」と、尋ねられましたので、「二時半頃まで御相続致しまして、永田さんの、お念仏申してござる口を押えて『念仏して助かるのではない。その念仏は助けられた跡やがな』と、これだけ。後半時間お念仏。『あなたの口から現れ給う南無阿弥陀仏こそ、あなたを助けて下さる《活き

た仏》です」と。あとは南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、この声だけででした」。

(『あなたの口から現れ給う南無阿弥陀仏こそ、あなたを助けて下さる《生きた仏》です』との仰せは、松並さんがしばしば仰せられ、それこそ《常のご持言》というべきお言葉である。実際、この言葉は念仏申す者がいつも聞く、あるいはいつも聞くべき金言である。ただし、この言葉はお念仏に親しんでいない人には実感しにくいのではなかるうか。こんな有難い言葉でも、念仏の申されていない人には受けとりにくいと思う。まことに弥陀は、念仏を与えて言わせて、聞かせて、信ぜしめるといふ大悲の方便をもつて導きたもう。)

岐阜の永田さんは常日頃お念仏を申しておられ、しかも何とか助かりたいと長年苦しんでおられたお方。その因縁があって、松並さんの、大悲の実感よりほとばしり出たこの一句が心の奥底に響いたのだと思う。松並さんの口から出る言葉は、如来様ご自身から出る大悲の言葉のようにリアルであつたらう。それなればこそ、遂に永田さんの心の奥に大悲心が

終る。

《盂蘭盆会法要》

8月10日（月）
午後2時始まり
念佛寺にて

*8月22日の「同朋の会」は休みます。